

研究ノート

学生によるスポーツ冊子作成プロジェクトに関する一考察

Analysis of a sports booklet making project by students

大 沼 博 靖

- I. 緒言
- II. 研究の目的
- III. 研究の方法
- IV. プロジェクトの概要について
- V. 学生の行動プロセスについて
- VI. 結果・考察
- VII. 課題と展望

I. 緒言

アクティブ・ラーニングという言葉が、教育の現場で頻繁に聞かれるようになって久しい。文部科学省ではアクティブ・ラーニングを「教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。」と定義している¹⁾。技術や知識が日々進化し、刻々と変わる状況に素早い判断が求められる社会では、課題や問題に対していかに当事者が能動的に協働して対応していくのかが求められる。

スポーツに関連する業務も状況は変わらない。スポーツとの関わりが単に「する」や「指導する」といったものに留まらず、旅行、広告、福祉など様々な分野と関わるようになった昨今では、関連する問題や課題にいかに対応するのかが、業務を効果・効率的に進める上では欠かせないものとなった。

学んだ知識やスキルを活用し、課題や問題に取り組むアクティブ・ラーニングの授業の1つとして、PBL (Problem based learning / Project based learning) を挙げることができる。油谷は、PBL授業をアクティブ・ラーニングのなかでも高次のものと位置づけ「問題解決能力、自己学習能力、分析能力、チームワー

ク力、コミュニケーション力などを効果的に、しかも高いレベルにまで育成することができる…」²⁾と述べている。

その意味では、スポーツに関わる人材を育成する高等教育機関が実施する科目において、PBLの手法をうまく活用し、課題や問題に対応する実践的な学びを導入することの意義は小さくないだろう。本稿では、実際に専門演習の中で取り上げて実施したスポーツプロモーションプロジェクト（ラグビー冊子の作成）を概観することで、その効果や課題を検証していく。

II. 研究の目的

本研究の目的は大きく2つからなる。1つ目は、静岡産業大学経営学部が平成28年度に静岡県西部地域政策局の受託事業として実施したラグビー冊子（ラ★ガール）作成プロジェクトを振り返り、その効果や課題を明らかにすること。2つ目は、今後スポーツ関連事業に取り組む際には、どのように計画・実施していくことが望ましいのかについてポイントを整理することである。

III. 研究の方法

実施したラグビー冊子作成プロジェクトの

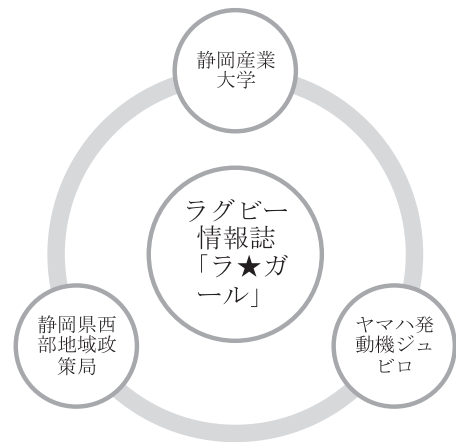
1) 文部科学省HP『用語解説』
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFilesafeldfile/2012/10/04/1325048_3.pdf

2) 市坪誠『授業力アップ アクティブ・ラーニング』実務出版、2016、p87

表1 Project-BLとProblem-BLの比較

	Project-BL	Problem-BL
各単元期間	週、月、学期、通年ベースのプロジェクトが可能である。	比較的短く、各1授業谷での実施が可能である。
最終成果物	成果物（製品）の創作と提示（実物が必要）。	可能な解決策の提示。
問題・議題の提示方法	実際に事象（要求）に関する議題・条件の設定。シナリオも可とする。	シナリオの利用、不完全構造問題が中心である。
授業の進め方	プロジェクトの進み方に大きく依存する。	各学習活動のステップを経て進める。

制作プロセス、携わった学生の行動についてPBLのプロセスを参考に整理・検証し、プロジェクトがもたらした効果や課題の抽出を試みた。PBLは、Problem based learningとProject based learningの2つからなる。両者の概要は、表1に示した通りである³⁾。今回取り上げたプロジェクトは、後述するがスポーツプロモーションのための冊子作成にあること、期間は半年間にわたる長期間であることなどを考慮すれば、後者のProject based learningにあたと判断できる。



IV. プロジェクトの概要について

今回のプロジェクトは、2019年のラグビーワールドカップ日本大会に向けて、静岡県内のラグビーに対する機運醸成のための女性向けラグビー情報冊子の作成・発行であった。学生が取り組む具体的な作業は、①情報冊子の出版計画の作成（コンテンツの選定含む）、②取材・編集・校正であった。女性というキーワードを設けたのは、プロ野球、相撲、プロレスなどいわゆる観るスポーツの振興に果たす女性の役割が大きくなっていることが挙げられる。

今回のプロジェクトは、静岡県西部地域政策局から静岡産業大学に対して委託された事業であった。平成28年6月より打ち合わせを開始し、本格的な取材は夏休み明けから開始している。磐田市内に本社を置き、ラグビー

トップリーグの強豪チームでもあるヤマハ発動機ジュビロの協力を得ながらプロジェクトは進められた。その意味では、産官学による共同プロジェクトととらえることもできる。

1. プロジェクトの背景

静岡県はサッカーの県としての知名度は高いが、ラグビーについては普及が遅れており、県内の高校ラグビー部は12校（合同チーム1校含む）と少なく、知名度が決して高いとはいえない状況であった。そのため、ワールドカップ（予選）を袋井市にあるエコパスタジアムで開催するにあたり、県民のラグビーに対する意識や人気を高めておくことが、特に行政サイドには早急に求められていた。

「静岡県はラグビーに対する意識が高い」というイメージが県内外に定着することは、2019年のワールドカップで実施される試合の対戦カードが、よりグレードアップすること

³⁾ 市坪誠『授業力アップ アクティブ・ラーニング』実務出版、2016、p102

を意味しているといっても過言ではないだろう。

2. プロジェクトの人員

今回のプロジェクトは、筆者のゼミであるOゼミチームと、T先生のTゼミチームの2グループが担当している（Oゼミチームは7名、Tゼミチームは総勢10名）。主に専門演習（ゼミ）の時間を活用しながら取材や編集作業などを行っている。本研究において取り上げる内容は、主にOゼミチームの活動である。

3. プロジェクトの目的・ゴール

プロジェクトの目的は、学生に対して座学からは学ぶことができない仕事としての冊子制作を体験させることであった。プロジェクトのゴールは、結果的に見ればラグビー冊子を作成することになる。しかし、携わった学生が冊子作成の初心者であることを考慮に入れば、それぞれのゼミで話し合い計画したコンテンツを印刷所に入稿できる状態にするまでがゴールととらえてもよいだろう。

4. プロジェクトで採用した手法

プロジェクトの実施に関しては、特に理論的手法を採用しているわけではない。細かな取材内容の決定などについては、指導教員（筆者）のマスコミ（出版社）での業務従事経験を活かしながらプロジェクトを進めた。具体的な業務の流れは以下ようになる（今回の作業は校正を2回実施）。

事前調査 ⇒ 建てページの作成（内容構成） ⇒ 取材内容策定（取材対象者選定・質問内容の作成） ⇒ アポイントメント ⇒ 取材 ⇒ 原稿作成・写真整理 ⇒ デザイナーと打合せ ⇒ 入稿 ⇒ 校正（初校） ⇒ 再校 ⇒ 校了

学生に対しては、プロジェクトを通して出版メディアが実際に取材を行う流れを体験させることに主眼を置いた。具体的には、取材対象者とアポイントメントを取り、実際に

会って話を聞くというプロセスである。今回の場合、取材のアポイントメントについては、県西部地域政策局担当者、ヤマハ発動機ジュビロの広報担当者、東海大学付属静岡翔洋高校ラグビー部監督の3名であり、冊子作成の経緯など細かな要件を説明する必要があったため、指導教員である筆者が行っている。

V. 学生の行動プロセスについて

1. コンセプトの作成

最初に「女性（女子）をスタジアムに連れて行く」というクライアント側のコンセプトをベースに、女性の目線をどのように冊子の中に反映していくのかについて、専門演習の授業を活用して学生を中心に話し合い、KJ法などを用いてまとめた（写真参照）。その結果として「イケメン」「筋肉」「わかりやすいルール」などといったキーワードを決定した。



ポストイットを用いてキーワードをグループ化した

2. 取材計画の立案、取材内容の作成

事前にOゼミチーム（筆者のゼミ）はラグビーに関連するパートを、Tゼミチームは地元のおすすめ店の紹介と大会の予選が実施されるエコパスタジアムの紹介パートを担当することが決まっていた。この段階では、取材対象者を誰にするのか、自ら調べることで作成できるコンテンツは何かを精査し、ページ構成を考えた。次に、ページ構成にそって役割を分担し、具体的な取材内容の作成を行った。

3. 取材（現地での取材）

取材は主にゼミ時間を活用する形で実施し

ている。ラグビー担当の筆者のゼミチームは、ラグビートップリーグ所属の地元のヤマハ発動機ジュビロ、東海大学付属静岡翔洋高校ラグビー部女子に対して取材を実施した。この段階では、取材対象者からすべてを聞けるわけではないため、取捨選択して必要と思われるものを中心に聞くことが重要という点を予め指示している。

地元おすすめ店等の紹介パートを担当するTゼミチームは、県の作成したグルメガイドを参考に地元の店舗にアポイントメントを取り取材を実施している。エコパスタジアムの取材については、県西部地域政策局の担当者を介して調整し取材を実施している。

4. 取材のまとめ、原稿の作成

ICレコーダーなどに収録した音源をテキスト化し、この作業と平行して撮影した写真の中から、どの写真を使用するのかについて検討をおこなった。Tゼミチームは、ページのラフデザインも行っている。原稿作成の最後は、プロジェクトに関わった学生に編集後記原稿の作成を依頼している。

5. 入稿・校正

原稿、写真がまとまった時点で入稿し、校正については全員が担当以外のページも校正する形式を取った。おすすめ店の取材ページについては、担当ではないが筆者のゼミチームも、店名、電話番号、営業時間といった、決して間違っはいけない箇所について最終確認をしている。「てにおは」についても大事だが、前述した様に、間違っはいけない箇所が特に重要である点は、予め指示している。



県庁で行われた報告会でのワンショット

6. 報告会（記者会見）の実施

冊子は12月上旬に完成しているが、12月16日（金）午後4時より、静岡県庁にて冊子完成の報告会を実施した。制作に関わった2つのゼミチームの学生8名が、静岡県庁に出向き冊子完成の報告を行った（写真参照）。新聞社やTV局が取材に訪れる中で、県政策企画部・森貴志部長に報告するという形式であったが、こちらも普段は経験することのない貴重な体験となったことは想像に難くない。

また、報告会に関する進行表や台本が予め用意されており、その流れ（ポイントになる質問を予め決め答えを事前に準備するという流れ）に沿って報告会が進められていくという形式も、実際に体験しなければわからなかったことである。

VI. 結果・考察

今回のプロジェクトをPBLのプロセスに当てはめて考えてみた（図1）。考察の際に参考としたのは、2004年に甲南大学の教職科目「教育の方法技術」で活用されたPBLプロセスである⁴⁾。

ステップ1

この段階では、成果物が女性の興味を引くようなラグビー冊子であることを伝えているが、冊子作成未経験の学生にとってはその実態をイメージすることが難しいものであった可能性が高い。授業内での模擬課題を用いた演習とは異なり、今回のようなプロジェクトは完成度の高さが求められる。その意味では、何を成果とするのかを明確にすること。どこまで学生にまかせるのかを明確にすることがポイントになる。

プロジェクトのゴールが明確であれば、そこに向けて何をすべきかをイメージしやすい。今回の場合、そのようなプロジェクトの経験者は皆無であった。未経験であるが故に、求められている内容、それにかかる時間がイ

4) 井上明『PBLによる問題発見解決型情報教育』平成17年度全国大学IT活用教育方法研究発表会、2005

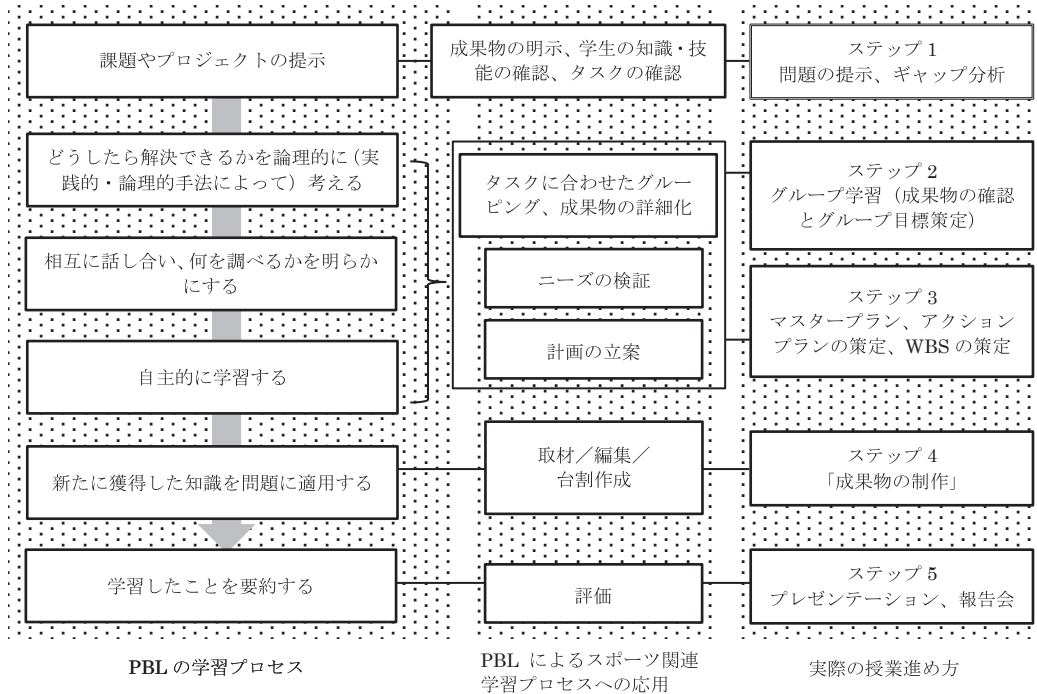


図1 PBLを活用したラグビー冊子作成プロジェクト学習プロセス

*B.マジェンダ、竹尾恵子『PBLのすすめ-教えられるが学習から自ら解決する学習へ-』学習研究社、2004、p27の図を筆者一部追加

メージできず、そのことが学生にとって不安を抱かせる要因となっていた。

また、学生の知識やスキルについて、この段階でそのギャップを分析する必要性は高い。プロジェクトがスタートの段階で、求められる知識やスキルとのギャップを明確にできれば、学生が何を学ぶ必要があるのか、どこまで作業を任せられることができるのかを把握できるはずである。

ステップ2～3

実際のプロジェクトでは、ゼミ生全員でKJ法などを用いて冊子のコンセプトや特集記事を何にするのか決めていった。その後、それぞれのパートに対して役割分担を行っている(タスクの決定)。このプロセスに教員は極力介入せず学生が自主的に行っている。今回のプロジェクトの場合、このプロセスはスムーズに実施できていたが、個々のタスクの詳細化は十分とは言えず、取り組む学生の仕事の

進展具合に差が生じていた。今後、このようなことがないように、グループごとにタスクを詳細化する必要があるだろう。

実際のプロジェクトにおいて計画の管理は重要である。今回は、この部分を教員が行ったが、学生に冊子作成の経験がないことが一番大きな理由である。しかし、計画の管理はプロジェクトをスムーズに実行するために必要不可欠な要素であり、社会に出てもからも求められるスキルである。その点を考慮すれば、WBS (Work Breakdown Structure) の作成方法を教授し実際に作成させるまで踏み込む必要があったと感じている。WBSとは「プロジェクト目標を達成し必要な成果物を生み出すためにプロジェクトチームが実行する作業を、要素成果物を基にして階層的に要素分解したものである」⁵⁾。

5) Project Management Institute, Inc. 『プロジェクトマネジメント知識体系ガイド (PIMBOKガイド) 第4版』2008、p338

教員側の視点に立てば、プロジェクトが半年間という長期に渡るため、専門演習内でのように行うのかについても検討の余地がある。専門演習では卒業論文の作成という大学における集大成に向けて、様々な知識やスキルを学び習得することが求められる。そのため、専門演習のすべての時間を活用することはできない。必要不可欠な要素に共通する部分を上手くプロジェクト内で消化できるよう授業計画を立てる必要性は高い。

ステップ4

実際の取材の場面では、これまで体験したことのない雰囲気にな不安を感じながらも、楽しく取り組んでいた。取材対象者への対応も比較的スムーズであり、学生の適応力の高さを感ずることができた。

一方で、事前準備と密接に結びつくことになるが、作成する記事に対するイメージをもう少し明確にして臨む必要性を感じた。臨機応変に対応することは悪いことではないが、ある程度、相手の変化を想定した質問パターンを準備していなければ、記事の構成にまとまりがなくなってしまうことを、もう少し徹底しておく必要はあるだろう。

ステップ5

今回のプロジェクトでは、静岡県庁での冊子完成報告会の実施や学内において静岡新聞社の取材を受けるなど、外部への報告などが実施できた。学生にとっては、新聞記者やTV局などマスコミが入った報告会が、どのように実施されているのかを知ることができる貴重な経験となった。一方で、専門演習など学内での報告は実施していない。いわゆる記者会見ではなく、詳細を理論立てて発表する報告会を実施することは、自分たちが経験したことを改めて振り返る機会となり、学びの深化につながる可能性が高い。

1. プロジェクトがもたらした学生への効果 (成長・成果)

プロジェクト全般において、取材内容の作成やその準備に重点を置いた。その理由は、

「準備がしっかりできていれば、取材は8割成功したようなもの」という筆者の取材現場での体験がベースとなっている。一方で、残りの2割は想定しないことの連続であるが、それが取材の醍醐味でもある。今回のプロジェクトの取材においても、予想とは違った対応に苦心していたが、個々の知識や知恵を総動員して対応していた。社会における仕事も想定外への対応が重要となることを考慮すれば、今回のプロジェクトで得た経験は非常に有意義なものであったと推察できる。

この点は、プロジェクト終了後に記述してもらったアンケートや、実際の取材現場での行動からも見て取れる。

▽アンケートのコメントから (表2)

「インタビューでは質問を事前に考えていましたがインタビューしながら話を膨らましていくことや、話の引き出し方など考えながら会話をすることがとても難しく緊張しました。そして、録音したインタビューを文に起こす作業では慣れていないのもあり時間がかかってしまいましたが最終的には難しい言葉を使わず読みやすい文に書き直すことができてとても達成感を感じました。」

「インタビューが難しく、ある程度何を聞きたいのか考えておけるけれど、話の内容流れから自分の言葉で臨機応変に何を聞くか考えるのが難しかった。緊張でとっさに言葉が出て来なくて大変だった。」

「写真撮影を担当し、選手それぞれの個性・人柄を上手く伝えることが出来るか工夫するのがとても大変でした。」

▽取材現場での行動から

専門演習 (ゼミナール) や取材時の行動や会話、プロジェクト終了後の記述アンケートから読み取れるが、1つ目の成長・成果は、プロジェクトの実行には他者との協働が欠かせないことが実感できた点である。

実際にヤマハ発動機ジュビロの取材では、選手を取材するチームは、臨機応変に役割を分担し、取材する役、ポイントを記述し整理する役、全体の進行を考える役を分担しながら

ら、丁寧に取材を進めていた。さらに、事前設定した質問以外に、相手の対応に合わせて質問内容を考えるなど、初めてとは思えない動きを見せていた。

清宮克幸監督への取材を担当した2名の女子学生は、日本を代表するプロ監督への取材のためか、緊張がほぐれず苦勞していた。しかし、その後の東海大学付属静岡翔洋高校ラグビー部女子への取材では、自らグラウンドへ出向きの確な取材を行うことができた。この点は、経験が安心と自信を生んだと考えられる。次節でも述べるが、この時に撮影した写真が表紙で使用するものとなった。

2つ目の成長・成果は、スポーツに対する見方が広がって点である。プロジェクトに携わった学生は、スポーツ経営やスポーツ教育といったスポーツに関わる学問を学んでいるが、サッカーや野球といった特定のスポーツに対する知識は持っているが、興味をもっていないスポーツの知識は乏しい。

このような学生が、プロジェクトを通してラグビーというスポーツに触れることで、ラグビーに対する理解が深まっただけでなく、様々なスポーツの存在を再認識しその魅力の一端に触れた意義は大きい。その意味では、学生が成長したポイントの1つと捉えることができる。

3つ目の成長・成果は、作成した冊子の編集後記でも触れられているが、磐田市や袋井市という自らが学ぶ地域を取材したTゼミチームが、事前準備から取材に至る一連の活動の中で、地域の人的物的な資源に触れ、その良さを再発見できた点を挙げることができる。

▽編集後記から

「この企画を担当するにあたり、作成当初は不安が大きかったです。しかし、取材を通して磐田市、袋井市の魅力を再発見することができ、この企画を通して、よりラグビーが多くの人に応援されるスポーツになってほしいと感じました」

「この企画を通して、地域の方々との交流もあり、磐田市、袋井市の温かさを改めて感

じることができました。ワールドカップという絶好の機会です。「ラ★ガール」を多くの方々に浸透することができたらなと思いました」
「今回、ラ★ガール企画に携わり、主に地元観光地や名物について取材させていただきました。おいしい食べ物や観光地の魅力をワールドカップの開催で、より多くの方達に知っていただけたら嬉しいなと思います」

2. 教員の想定を超えた学生の行動について

表紙で使用した写真（表紙参照）と地域のおすすめ店ページのラフデザインは、教員が想定した以上に学生のアイデアが溢れた内容となった。冊子の完成度については、指導した教員だけでなく、冊子に対する静岡県の担当者や県ラグビー協会の担当者が高く評価していた点からも容易に推察できる。

東海大学付属静岡翔洋高校ラグビー部女子の選手たちをモデルとした表紙写真は、教員が特に構図に対する指示はしていなかった。学生だけで取材に出向き監督や選手に的確な質問をし、アスリートの明るさと女性らしさが溢れる写真を撮影してきたことは、高く評価できる。



また、ラ★ガールな1日という地域のおすすめ店を取材した高城ゼミのチームは、ストーリー仕立てでラフデザインまでしっかりと作成できた点も高く評価できる。出版業務は分業制で行っているため、編集とデザイン

(レイアウトを含む) は別な担当者が行うことが一般的である。Oゼミチームは編集業務に専心していたが、Tゼミチームはラフデザインにまで踏み込んでいた。

3. このプロジェクトがもたらした汎用的な価値

現代社会は、自ら考えるだけでなく他者と協働して新しい答えを導くことが求められている。協働の場面において適応力は必要不可欠なものであり、その点を考慮に入れば、人に会って話を聞くことが必要不可欠な今回のプロジェクトでの経験は、今後どのような職種に就いたとしても活かすことができる汎用的な価値であると考えられる。

VII. 課題と展望

今回のプロジェクトは、納品日が早まったため取材内容の決定や取材・編集作業に注力することが多かった。そのため、活動に対する振り返りなどを実施することができなかった。こういったプロジェクトを実施する場合、定期的に活動内容を報告させフィードバックする必要がある。この点は課題として挙げることができる。

考察でも触れたが、外部と連携をはかるプロジェクトを進める場合、早い段階から取り組み全体のイメージを示す必要がある。特に未経験や経験の浅い学生を参加させる場合、何が成果物として求められ、その際に求められるクオリティはどのレベルにあることをより明確にすることが必要である。

学生が得た知識やスキルは、当事者にとってかけがえのないものとなっている。この知識やスキルを彼らだけのもので終わらせず、後輩の学生に活かしていく仕組みを作る必要性は高い。今後これらをしっかりと整理し、知識やスキルの継承を図っていくことによって、学生の創発を促すこと可能を高めることが期待できる。

表2 事後アンケートの結果（原文のまま掲載）

学生	今回のプロジェクトに携わって感じたことは？	産学官連携プロジェクトでは実際に何が必要だと感じていますか？
F君	ヤマハの選手のインタビューの際に選手の体の大きさ、雰囲気は驚きすぎて緊張したが、ラグビー選手としての熱い想いやフランクなプライベートの事も質問をできたと、とても自分の為にもフリーペーパーを読む方の為になったと思う。日本を背負って、世界で戦う選手もいたので、そんな方にインタビュアーできたという事は、とても自分にとっていい経験になった。	今後はもっと地域の方と連携しながら様々な事をやっていけたらいいと思う。
A君	今回ことごとくプロジェクトに関わることににより自分もあまり詳しくなく接点のないスポーツ・選手を自分で調べそれをパンフレットを手に取る人達にどのようなようにすれば興味を持ってもらえるのかまた写真撮影を担当し、選手それぞれの個性・人柄を上手く伝えることが出来るか工夫するのがとても大変でした。今まで携わることの無いプロジェクトに加わる事で人に伝える事の難しさをより体感できましたし、自分自身様々な人達と話し合うことにより良い経験になりました。	プロジェクトを進めていく中でやはり連絡・連携の大切さが重要なのだと感じました。お互いに時間や都合が悪い時が必ずあるのでその部分を互いに助け合いサポートすることでより良いものが出来上がりますし、アイデアが浮かんだら迷わず提案していくことも大切なのだと思います。
B君	このようなプロジェクトに携わるのは初めてのことだったのでどうしたらいいのか分からないことが多くありましたが、中でも文章の構成が難しかったと感じました。インタビュー内容のまとめ方や読んでる人に見易いようにすることが想像以上に大変でした。	早いうちに企画を練り始めるのは必要だと思った。学生はこういった経験をするのが初めてという人が多いと思うので、スローペースで始めていっても余裕があるようにするとやりやすいと思います。
Kさん	インタビューが難しく、ある程度何を聞きたいのか考えておくけれど、話の内容流れから自分の言葉で臨機応変に何を聞くか考えるのが難しかった。緊張でとっさに言葉が出て来なくて大変だった。またラグビーに関することで自分がなかつたの冊子を作る時とどきどきするような内容を入れれば見られる人たちに興味を持ってもらえるのか分からなくて難しかったと感じた。	また冊子を作るのも良いと思った。どこかの企業とコラボしてポスターを作る。
K君	ラグビーはマイナーなスポーツで、プロ野球やリーグと比べ人気はないがプレーしている選手たちの姿勢、取り組みはプロ野球やリーグの選手に負けていないと思いました。なのでワールドカップをきっかけにラグビーの知名度が上がってくれば人も自然と上がってくるのではないかと思います。役にも立たないことは個人的であるが、一流の選手とお話ができただけで自分のプレーにも繋がりが生かせる部分があり、自分の為になりました。難しかったことは、前例がないことだったのでどこから手を付ければいいのか、どういう風に仕上げたいけばいいのかイメーজがしにくかったのとラグビーのことに詳しい知識が0の状態から始めたので大変でした。	今回のラグビー★ガールは時間が限られた中での作成だったので、プロジェクトが行えるだけの時間が必要だと思います。
Sさん	インタビューでは質問を事前に考えていましたがインタビューしながら話を膨らましていくことや、話の引き出し方などが会話をするのがとても難しく緊張しました。そして、録音したインタビューを文に起こす作業では慣れていないのでもあり時間がかかってしまいました。最終的には難しい言葉を使わず読みやすい文に書き直すことができてとても達成感を感じました。私自身もラグビーについて詳しくなかったのですがこの冊子の作成を通して改めて魅力のあるスポーツだと実感しました。	地域の方々との交流なども積極的に行えるといいと思います。

表3 プロジェクト参加学生の編集後記

学生	編集後記コメント
A君	今回の企画を通して、今まで興味を示すことのなかったラグビーというスポーツに魅力を感じることができました。メンバー全員で協力し作成した冊子を、多くの人に読んでいただき興味を持ってもらえれば嬉しく思います。
Uさん	今回、磐田市と袋井市を取材して、まだ知らないお店や名産品がたくさんあり、もっと知りたいなと思いました。また、エコパスタジアムを見学させてもらい普段できない貴重な体験ができてよかったです。
Kさん	全くラグビーの知識がなかった私は取材を通して様々なことを学ぶことができました。取材は初めてでうまく言葉がでてこなかったり色々大変でしたが、自分にとつてとても良い経験になったと思います。
K君	今回ラ★ガールの取材、冊子作成にあたり、ゼミのメンバーをはじめ、たくさんの方にご協力いただき無事パンフレットが完成することができました。本当にありがとうございます。
Sさん	今回取材を通してラグビーに大変魅力を感じました。この冊子を読んで女性のみならず多くの方がラグビーに興味を持っていただけたら幸いです。取材にご協力いただいた皆様本当にありがとうございます。
Nさん	この企画を担当するにあたり、作成当初は不安が大きかったです。しかし、取材を通して磐田市、袋井市の魅力を再発見することができ、この企画を通して、よりラグビーが多くの人に広げられるスポーツになってほしいと感じました。
B君	このような取材の経験は初めてのことで、いたらないところも多くありましたが、皆さんの協力のおかげで無事完成させることができました。この冊子を見て、少しでも多くの方々がラグビーに興味をもってくれたらと思います。
F君	今回の取材を通して、自分自身あまり知らなかったラグビーについてたくさん知ることができました。この冊子をたくさんの方に読んでもらって、ラグビーの面白さを知っていただきたいです。そして2019年ラグビーW杯日本大会を盛り上げていただけたら幸いです。
M1さん	この企画を通して、地域の方々との交流もあり、磐田市、袋井市の温かさを改めて感じて感銘することができました。ワールドカップという絶好の機会です。ラ★ガール”を多くの方々に浸透することができたらなと思います。
M2さん	今回、ラ★ガール企画に携わり、主に地元の観光地や名物について取材させて頂きました。おいしい食べ物や観光地の魅力をワールドカップの開催で、より多くの方達に知っていただけたら嬉しいなと思います。